海と灯台プロジェクト　2023年度

「新たな灯台利活用モデル事業」実施事例集（①調査検証コース）

実施事例（①調査検証コース）

大バエ鼻灯台（長崎県平戸市）

「灯台マルシェ」を人々が集う新たな地域催事の場に

講演会、ワークショップ、灯台メニュー開発、地域の人々との協働で灯台マルシェを開催

恵山岬灯台（北海道函館市）

「灯台の宿」「灯台サウナ」など観光の魅力づくりで地域活性化

知られざる恵山岬灯台の物語を発掘し、ツアー等の体験メニューを開発

長尾鼻灯台（鳥取県鳥取市）

高校生の地域学の授業に灯台プログラムを

高校で9回の連続授業（海上保安庁の灯台講義や灯台見学等）、学びをもとに漫画を作成・配布

生地鼻灯台（富山県黒部市）

官舎跡の活用含む宿泊体験プログラムづくりで観光事業を

灯台資料館と官舎跡を活用した宿泊施設の整備検討、生地地区周遊ツアーを開発

※②利活用実施コースについては今年度新たに設置するコースであるため、実施事例がございません

大バエ鼻灯台（長崎県平戸市）

事業テーマ　「灯台マルシェ」を人々が集う新たな地域催事の場に

背景と課題　大バエ鼻灯台は、歴史的・文化的背景、素晴らしい景観に恵まれながらも、
長崎県の最北端の地でもあり、周辺地域だけでなく地元の人々にもまだまだその魅力が認知されていません。

調査研究概要

1．大バエ鼻灯台を基点に、地域の歴史・文化について調査研究

①灯台とその周辺の戦争の遺構についての調査・講演・ワークショップの実施
②灯台のある御崎地区と捕鯨の歴史について調査・講演・ワークショップの実施
③渡鳥の中継地としての灯台のある地区の調査・講演・ワークショップの実施
④「灯台メシ」メニューを地元飲食店様と研究の実施

2．灯台マルシェを開催し、調査研究成果の発表と集客試験実施

①有識者による「戦争の遺構」ミニツアー（参加者のべ60名）
②捕鯨の歴史と「勇魚太鼓」の発表（灯台マルシェ来場者約1,000名）
③バードウォッチングで渡鳥の調査研究（参加者のべ60名）
④「灯台メシ」メニューの発表（10店舗、10のメニュー開発）
⑤灯台マルシェ開催により大バエ鼻灯台への集客試験実施
（目標300名に対し、実数約1,000名来場）

調査研究によって導かれた灯台のストーリー

遣唐使、捕鯨、戦争…歴史と自然にふれられる灯台

玄海灘を望み、遠くは壱岐や対馬を眺める生月島（いきつきしま）の、約100mの断崖絶壁に立つ白亜の大バエ鼻灯台。

島の名は、日本に戻る途中の遣唐使がこの島を見つけて安堵し「一息ついた」ことに由来します。

そんな海上航路の要所に建てられた大バエ鼻灯台のある場所は、江戸時代には捕鯨船の安全航行を見守り、

戦時中には砲弾庫として利用された歴史も。

灯台本体に照射灯が併設されている点が珍しく、外側には海の絶景を楽しめるよう階段が設置されています。

大陸からの渡り鳥の中継地で、様々な野鳥にも出会えます。

調査研究・実証実験による成果

灯台×戦争・捕鯨・渡り鳥 ワークショップ

12月と1月に計3回、専門家の講演と、
地域の人々の意見交換ワークショップを実施。
戦争・捕鯨・渡り鳥をテーマに、
灯台の利活用について協議。

灯台周辺ガイドツアーを実施

有識者によるミニツアーで、灯台が戦時中に
砲弾庫になった歴史や、今も残る戦争遺構を紹介。
地元ガイド協会が継続して研究を重ねるきっかけと
なった。

渡鳥の中継地 バードウォッチング

1/28開催の勉強会を踏まえ、渡鳥の中継地であること
をアピールし、魅力的な場所であることを再確認。
集客の可能性を示した。
地元協会が本ツアー継続予定。

夕陽と灯台を背景に 「平戸神楽」披露

夕陽と灯台を背景に披露することで、
この神楽の神秘的な魅力を発信。
来場者からは「自然と涙が流れた」など、
地元神楽の魅力を再発見する機会となった。

10店舗の「灯台メシ」を 開発・発表！

地元・近隣の飲食店と共にメニューを開発・発表。
ほとんどの店舗で完売！
イベント後も「灯台メシ」の販売を促し、
灯台の魅力を継続発信することになった。

長崎県の最北部への集客実験

インフラの不便さから
この地に集客は難しいという概念があった場所に
予想をはるかに超える集客を実現！
（目標300→実数約1,000）

恵山岬灯台（北海道函館市）

事業テーマ　灯台を生かした観光の魅力づくりで地域活性化

背景と課題　函館東部エリアは、人口減少や漁業の衰退などの課題を抱える。
エリア内にある恵山岬灯台は北海道の発展を支え「日本の灯台50選」に選ばれた灯台だが、その価値は認知されておらず、訪問者も少ない。

調査研究概要

1．恵山岬灯台の近代産業建築物としての価値に関する調査研究

①現地調査（灯台及び周辺に関する情報収集、イメージ撮影）
②文献調査（灯台資料館所蔵資料・書籍・新聞等）
③ヒアリング調査 （研究者、海保職員、元灯台守、地域住民など10名）
④専門家視察による調査
⑤意識調査としての写真募集（恵山岬灯台Instagramフォトコンテスト）
⑥認知度調査（市民220人、隣接ホテル宿泊客100人にアンケート）
⑦隣接ホテルへの「灯台ルーム」設置等に関する専門家調査

2．恵山岬灯台活用事業の試験実施

①恵山岬灯台ガイドウォーク試験実施（のべ4回、26名参加）
②３灯台周遊ドライブコース試験実施（のべ2回、13名参加）
③話題づくりイベント「灯台サウナ」試験実施（10名参加）
④Instagramフォトコンテスト入賞作品展を実施

調査研究によって導かれた灯台のストーリー

世界と日本、北海道と本州をつなぐ海の守り神

明治23年初点灯、130年もの長きにわたり津軽海峡を行きかう船の安全を守り、

北海道開発のための資材運搬や本州への道産品輸送を助けました。

周辺海域は活火山・恵山と海流の影響による海の難所。

特に海霧は航海者たちを悩ませ、

江戸時代、大黒屋光太夫を伴って通商交渉に訪れたラクスマンが漂流した歴史もあり、早くに霧笛が設置されました。

大海原と活火山に囲まれて輝く孤高の存在感と地域貢献の物語で、人々に感動を与える灯台です。

昭和20～30年代の恵山岬灯台

恵山岬灯台（北海道函館市）

調査研究・実証実験による成果

**130年間の知られざる
ストーリーを明らかに**

調査を通じ、地域住民も知らなかった
恵山岬灯台の歴史や、北海道開発への貢献、
トリビアを明らかに。
年間1000万PVの函館市観光サイトに記事掲載。

**恵山岬灯台
ウォーキングツアーを開発**

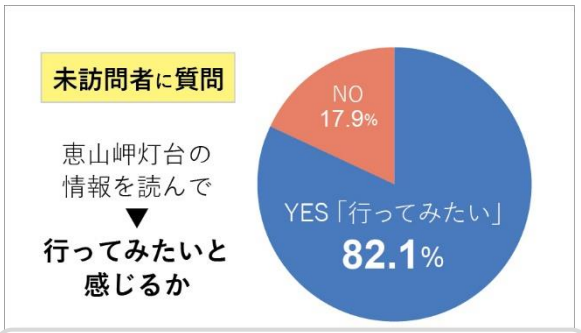
30分間、ガイドが歩きながら12のフリップで
恵山岬灯台を紹介するツアーを開発。
灯台の役割はもちろん、
周辺の地形や歴史も学べる充実した内容に。

**市内３灯台を含む
周遊ドライブコースを開発**

恵山岬灯台、日浦沖灯台、汐首岬灯台と、
世界遺産に選ばれた縄文遺跡等、
函館東部エリアをめぐるコースを開発。
灯台について学べるクイズ15問も作成。

**日本初イベント
「灯台サウナ」が話題に**

灯台とサウナの意外な歴史的つながり、
灯台バルコニーで「ととのう」
非日常体験が話題を呼び、
NHK、HBC、北海道新聞等がニュースに。



**「恵山岬灯台に行ってみたい」
が82%**

市民アンケートで手ごたえ。
恵山岬灯台に行ったことがない方のうち、
「灯台の情報を読んで、行ってみたいと感じた」
方の割合は82%！

**フォトコンに120点、
老舗バイク雑誌が注目**

写真愛好家や市民から美しい灯台写真が
多数寄せられ、写真展示会も好評。
老舗バイク雑誌が「ダムの次は灯台だ！海岸線を走りたくなった」と記事に。

長尾鼻灯台（鳥取県鳥取市）

事業テーマ　高校生の地域学の授業に灯台プログラムを

背景と課題　海にまつわる歴史トピックが多い青谷地区。2019年に北前船寄港地として日本遺産認定され、弥生時代の海上交易の遺物などを展示する施設が2023年秋に開館予定です。しかし、灯台については、地元住民の認知や関心が低く、訪問者も少ない状況です。

調査研究概要

1．長尾鼻灯台の地域のランドマークとしての価値に関する調査研究

①地域に根差した学習としての青谷高校での授業（全９回実施）
- 現地調査（海上保安庁と連携した内部見学、展望エリア見学）
- 弥生文化とのかかわりを知る（鳥取県弥生王国推進課による授業）
- 海とつながってきた歴史を知る（鳥取市地域振興課による授業）

②地域のにぎわいづくりのつどいでの地域住民への利活用提案

2．長尾鼻灯台活用事業の体系化

①青谷高校の生徒から、授業を通じて「何を学んだか」をヒアリング

②鳥取市出身のイラストレーター 伊吹春香氏によるマンガ化
（伊吹氏は自動車メーカーフィアットの広報実績もあり、
近年は鳥取市や鳥取県の広報活動も多く地元の認知度が高い）

③成果物を青谷高校、青谷中学、青谷小学校、ほか観光施設へ寄贈することで
今期の調査結果を活用し地域に根差した学びを作る。

調査研究によって導かれた灯台のストーリー

古代から続く人と海との歴史を伝え、未来を照らす

弥生時代の漁労や海上交易に関する遺物が多数出土し、

江戸時代には北前船の寄港地として栄えた鳥取市青谷地区にある長尾鼻岬。

古代から日本各地はもちろん、大陸からも人やモノが集まり、文化が育まれた場所です。

昭和2年に前身の「夏泊灯柱」が設置され、昭和28年、長尾鼻灯台が初点灯。

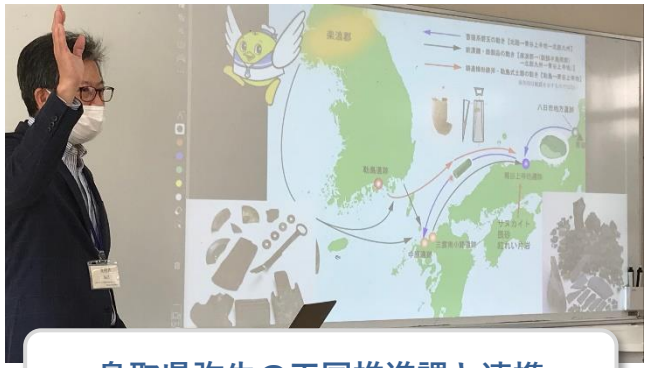
日本海を行きかう船の安全航行を見守り、この地が海上交通の要衝であることを示す象徴として、

若者や市民に、地域を学び、誇りをもつ格好の機会を提供します。

調査研究・実証実験による成果

青谷高校・海上保安庁と灯台授業

実際に地域で進められる地域学の授業と連携し、
長尾鼻灯台を中心に海とつながってきた
青谷の歴史を知る授業を構築。



鳥取県弥生の王国推進課と連携

青谷高校の地域学の授業と
鳥取県の弥生の王国推進課を連携させ、
地域で建設が進むかみじち史跡公園と
灯台の関連を地域の学習に落とし込んだ。

まちづくりのつどいで
灯台利活用を提案

青谷のまちづくりを考えるつどいに参加し、
工芸品や食品だけではなく、
「海とつながる文化・歴史」が財産だと再認識する。
今後灯台と連携する視点も啓発した。

青谷高校の授業成果をマンガ化

高校生考案の内容を、
イラストレーター伊吹氏がマンガ化。
青谷高校、中学、小学に寄贈。
授業での活用を予定。また観光施設で無料配布。

マンガ化を地元メディアで
「情報発信

青谷高校の授業にとどまっていた
灯台の価値見直す学習の成果を
地元メディアにより拡散。
多くの人に灯台の存在や価値を発信。

デジタル版各種媒体で
公開・活用促進

制作したマンガ冊子をデータ化。
鳥取市、鳥取県、青谷町、海保のサイトで公開。
各観光地・観光案内所で無料配布・ポスター設置に
より広く活用を促進した。

生地鼻灯台（富山県黒部市）

事業テーマ

官舎跡の活用含む宿泊体験プログラムづくりで観光事業を

背景と課題

灯台の鍵は地域に預けられているものの、地域内での活用や、観光スポットとのコラボが出来ていない。
また、エリア内にある槍ヶ崎灯柱やたいまつ灯台、生地鼻灯台敷地内にある資料館と官舎倉庫跡が活用されていない。

調査研究概要

1．地域の物語を整理し、周遊ルートや「海と灯台の物語」のアウトプット作成に向けた調査やフィールドワークを実施

①地域の魅力発掘調査
②観光関係者等を招聘し、周遊ルート2つのフィールドワークを実施

2．宿泊施設の整備や、付帯施設（官舎の活用）に向けた計画作成

①エリア内のランドマークやキーマンを取材し、資料化
②宿泊施設のテーマやデザイン、官舎跡地のリニューアル計画について協議

3．自治体（市長）・市民・地元有識者（県議・市議）の巻き込み

①実行委員会や地元有識者による定期的な会議
②市長や市民とともにタウンミーティングを開催し、地域内のコンセンサスづくり

調査研究によって導かれた灯台のストーリー

灯台と漁師町の成り立ちがリンクする灯台の聖地

日本海に面した漁師町・生地における灯台の歴史は、室町時代にさかのぼります。

「暴風で遭難しかけた漁船が神社の御神火を頼りに帰港できた」伝説があり、

それにちなんだ「たいまつ祭り」が500年以上も催行。

大正15年には鉄造の槍ヶ崎灯柱が設置され、昭和26年にはより遠くから灯火が見えるよう、

漁師たちの請願により生地鼻灯台が建造されました。

灯台は、北洋漁業の船の安全航行を守って町の発展を支え、

特に北海道から海を通じてもたらした昆布などは生活や文化にも大きく影響しました。

灯台の歴史と共に地域の海洋文化にふれることができる、灯台の聖地です。

生地鼻灯台（富山県黒部市）

調査研究・実証実験による成果

生地の「海と灯台の物語」の情報収集と整理

地域内の各施設で保存されている灯台及び生地地区の海洋文化を表現した資料収集しデータ化。
老舗昆布店・酒蔵など、生地地区の海洋文化を守り続けるキーマンを取材。情報収集と協力体制を構築。

観光関係者やターゲット層向けフィールドワーク

県内外から誘致をし、灯台を起点とした新しい周遊ルートやターゲット層・顧客単価などを検証するフィールドワークを実施。女性を中心とした県内外（東京・長野・新潟・富山）の19名が参加。

生地の海洋文化を学ぶ親子向けフィールドワーク

生地地区4家族15名に参加いただき、
生地の漁業の歴史や魚さばき体験など
漁村文化を体感する親子向けの
フィールドワークを開催。

灯台周辺での宿泊施設整備計画テーマは“富山湾の漁師“になれる宿

生地鼻エリアの漁師町の文化体験を含む
滞在体験型宿泊施設の整備計画を策定。
コンテナハウス型で
漁具などの暮らしの道具を用いた空間作りを計画。

灯台横の資料館（官舎跡）の整備計画（海洋文化体験施設の整備）

生地鼻灯台に隣接する官舎跡倉庫に
貯蔵されている漁具や漁業資料を活用し、
生地や富山の漁業が学べる
海洋文化体験施設の整備計画を策定。

自治体・市民を巻き込んだタウンミーティングの実施

黒部市長をはじめ、地元議員・有識者・観光ガイド・
住民など多様な職種、また年齢層も20代～70代と
幅広い世代に参加いただき、灯台周辺での宿泊拠点の
開設や周遊プランの整備について意見交換。

趣旨

近代航海技術の発展と共に、海の安全を見守り続けてきた灯台は、
GPSの発達などにより、従来の航路標識として中心的な役割を担う存在から、
その役割や価値を改めて見直す必要が問われている。

日本の海岸線において、海のシンボルとして存在し続けてきた灯台は、
近代産業建築物として、また地域の海の記憶を留める海洋文化遺産として、
奥深い魅力と価値を有している。

灯台が守り、見つめてきた海は、地域ごと、さまざまな物語を有しており、
それらを灯台の価値と共に編集していくことは、
日本の海洋文化をより魅力的に、また次世代に継承していく機運となりうる。

本事業は、灯台の利活用に関する取り組みにより、灯台の存在意義を高め、
灯台を起点とする海洋文化を次世代へと継承していくことを目的として実施する。

※ 日本財団「海と日本プロジェクト」の一環として、灯台を中心に地域の海の記憶を掘り起こし、
地域と地域、異分野と異業種、日本と世界をつなぎ、新たな海洋体験を創造していく
日本財団「海と灯台プロジェクト」の2023年度事業のひとつである。